

# ニュースレター 事業短信

from AIKOH

2018(平成30)年5月15日(火) **No.149**

<発信者> 社会福祉法人愛光理事長・法澤奉典  
043・484・6391(本部) / 043・484・6571(理事長室直通)  
(URL) <http://www.rc-aikoh.or.jp/>  
(Eメール) [mail@rc-aikoh.or.jp](mailto:mail@rc-aikoh.or.jp)

## CONTENTS (今月号の内容)

- \* 日誌抄録(1頁) : (2018年4月1日~)
- \* おもな動き(2頁) :
  - ・ダ・カーポを迎えて~あいとひかりのコンサート 2018
  - ・NHKハート展・全国で順次開催
  - ・職員状況(2018年4月中)
- \* 現場の内外で(3頁) :
  - ・寄せられた感想
- \* 情報&ニュース(4頁) :
  - ・終末期と「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)」
- \* マイタウン(5頁) :
  - ・ちびっ子たちの新学期
- \* 三代目燈台守(6頁) :
  - わが家の「明治150年」

## ▽日誌抄録(2018.3.1~)

月/日(曜)	記事
4 / 2 (月)	採用・昇進・異動辞令交付式(本部第1会議室) / 新任職員研修(~4日)
10 (火)	千葉盲学校入学式
11 (水)	サービス(提供/管理)責任者会議(本部第1会議室)
17 (火)	職員健康診断
18 (火)	施設長会議(本部第1会議室)
21 (土)	あいとひかりのコンサート(ダ・カーポ公演:四街道市文化センター)
22 (日)	佐倉市精神障害者家族会「かぶらぎ会」総会(ミレニアムセンター)
24 (火)	施設長会議(本部第1会議室)
25 (水)	施設長会議(本部第1会議室)
26 (木)	NHKハート展(~5/5:東急百貨店渋谷本店)
27 (金)	根郷地区「子ども食堂」視察(根郷公民館) / 南北首脳会談(板門店)
29 (日)	昭和の日
5 / 3 (木)	憲法記念日
4 (金)	みどりの日
5 (土)	こどもの日 / 立夏

卯(う)の花の、匂う垣根に 杜鵑(ほととぎす)、早も来鳴きて

忍音(しのびね)もらす、夏は来ぬ (佐々木信綱作詞/小山作之助作曲『夏は来ぬ』)

5月5日・立夏。すでに“クールビズ”は始まっています。連休中の好天が続けば、そのまま半そで姿が主流になりそう…と思いきや、連休明けの5月7日からの週は3月下旬の気温に逆戻り。一旦しまった長袖の衣類を、あわてて取り出した日本列島でした。

## ▽おもな動き

### ダ・カーポを迎えて《あいとひかりのコンサート 2018》

「みかんの花咲く丘」「茶摘み」「月の砂漠」…歌詞が自然に口ずさめる愛唱歌、「結婚するって本当ですか」「宗谷岬」「野に咲く花のように」…誰もが聴いたことのあるヒット曲。〈ダ・カーポ〉こと榎原まさとし・広子夫妻のかけあいトークに会場の雰囲気はすっかりなごやかになりました。デビューは1970年代だそうですが、いままあのころのままの親しみやすくやさしい歌声。

愛の灯台基金のチャリティ・イベント「あいとひかりのコンサート」は今回で7回目。おかげさまで天候にも恵まれて満員御礼の大盛況でした。ご来場いただいた皆様にはご満足いただけたでしょうか。ご協力に心より感謝申し上げます。

(3ページに関連記事)

### NHKハート展・全国で順次開催

障害のある人がつづった詩と著名人のアート作品を組み合わせた「第23回NHKハート展」(主催：NHKほか)の東京展開会式が、4月26日、東京・渋谷の東急百貨店本店イベントサロンで行われました。

応募総数4083編から選ばれた50編の入選者に、秋葉純江さん(リホープ利用者)の作品が含まれ、秋葉さんは開会式に出席しました。中川光男施設長らに付き添われて会場に到着。展示された作品にはイラストレーターの泊明(とまりあきら)さんのイラスト画と次のようなコメントが添えられ展示されていました。

＜心の葛藤に決して負けない強い強い心に胸打たれました。ハート♥のクイーンは女戦士がモデルとも言われています。立ち向かう姿勢に皆が応援しています＞(実際の絵)

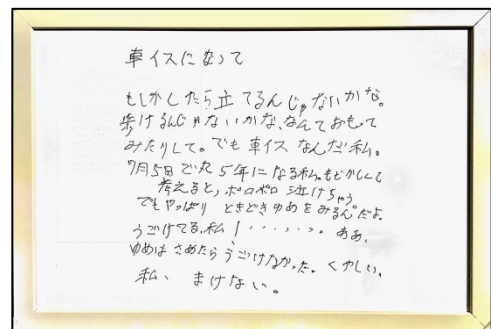
5月2日にはリホープ利用者5名が会場へ。全ての作品には点字による表示が添えられており、音声化した詩を聞くコーナーも用意され視覚障害のある人も展示作品を鑑賞することができました。

「目の見える人に読んでもらうのもいいけど、自分で点字を通して詩を読めるのはもっといいね。人が多くてびっくりしたけど、渋谷まで出かけて良かった」

「今度は自分も詩を書いてみようかな」

と意欲を燃やす利用者もおり、仲間の活躍に刺激を受けながら、共に喜び合える一日となりました。

なお、この作品展は全国各地の会場で順次公開されます。



<b>■職員状況</b> (2018年4月中)	*採用:19(正職10・サポート1・パート9) *退職: 2(パート2) *2018年4月30日現在:職員現員354人 (正職164/サポート又は常勤嘱託42/パート又は非常勤嘱託148) *育児休業:0 *休職:1
----------------------------	--

## ▽現場の内外で

### よせられた感想

#### ◆ご来場者の声（抜粋）

<良かった。広子さんの声に魅せられました。美しい歌声をありがとう。NHKFM「音楽遊覧飛行」\*を生で聴けて感動！元気が出ました>

\*ダ・カーポ榊原広子さんが進行役のラジオ番組（毎週月～木、前 9:20～10:00）

<お二人の歌声に心洗われるようでした。どうぞまた四街道に来てください>

<久しぶりにすばらしい歌を聴くことができました>

<ここ数年楽しませていただいているこのコンサートですが、いままでいちばん「愛」と「光」にあふれていて、とてもすてきでした。小学生のころ、テレビの前にラジカセを置いて録音した「空からこぼれたSTORY」が聴けて本当にうれしかった>

<コンサートに行くのをあきらめかけていましたが、歌が大好きな高齢の母が大変喜んでくれました。ご配慮ありがとうございました>

<ステージに飾られたお花が素晴らしかった>（同趣旨2通）

<会場の文化センターに障害者席を用意してあるのは良かった>

<高齢者も多く、開場前に並んで待つのは大変！指定席にしてください>（同趣旨4通）  
（そのほかに寄せられたご意見はホームページでご紹介します）

#### ◆ルミエール入所者は…

入所者12名とご家族6名が参加されました。

いつもコンサートの途中で大きな声をだしてしまうSさん。付き添いのご家族は今回も最初から途中退席を覚悟していらっしゃったようでした。ところが今回は最初から最後まで、静かに聴く事ができましたと感激しておられました。

#### ◆はちす苑からも出かけました

特養ホームはちす苑入居者3名もチケットを買って参加していただきました。

「サイン頂くために色紙を用意しようかしら」

と何日も前から当日を心待ちにされていた女性入居者Aさん。

当日、コンサート会場では、どの方もヒット曲や童謡・唱歌など、体でリズムをとりながら、一緒に口ずさみ、童心に帰って楽しんでいらっしゃいました。あっという間の時間を過ごされた様子で、参加された皆さんは疲れも見せず、アンコールまで大好きな音楽を堪能されました。

「やっぱりプロは盛り上げ方が違うねぇ♪楽しかったよ！」

と大満足の様子の男性入居者Bさんは、

「また誘ってね！」

## ▽情報&ニュース

### 終末期と「アドバンス・ケア・プランニング（ACP）」

#### ◆「アドバンス・ケア・プランニング」への関心

誰にもやってくる終末期をどう迎えるか。それは人の「生老病死」と向き合うことの多い職業人として、常に意識しておかなくてはならないことです。もちろん、自分自身もいずれ当事者の一人になるのも避けられない問題です。そして態度決定を迫られるのは、医療の場面に限らず、これからは介護のあり方にも深く関わってくると思われま

す。厚生労働省がこのほど11年ぶりに終末期の医療と介護のガイドラインを改訂したという記事が主要各紙に掲載されました。その中では注目したい新たな考え方（取組み）が紹介され、議論を深めることを呼びかけています。（3/27朝日、4/17読売、4/16日経、4/21毎日の各紙社説）

「アドバンス・ケア・プランニング（ACP）」、すなわち「患者の意志決定支援計画」といわれる考え方がそれです。家族や看護師が治療や介護の方針を本人と繰り返し話し合っ

て計画を立てていくという手法が既に諸外国で始まっているそうです。新ガイドラインでは、ACPを医療・介護の現場に普及させるため、繰り返し話し合った内容をその都度文書にまとめておくこと、本人・家族と医療や介護の従事者がそれぞれ共有することが重要であると指摘しています。併せて家族や介護従事者に対する研修や啓発徹底すべきことも記事は提言しています。

#### ◆これまでの主流「AD」の問題点

これまで、終末期の意思決定については、将来、自分で判断できなくなった場合に備えて、受けたくない治療や受けたい治療を明らかにしておくリビングウィルと、自分の代わりに治療方針を決定してくれる人の指名を合わせた、「事前指示（Advance Directive＝AD）」という方法があり、欧米を中心とした諸外国で法制度が整備されてきました。しかし、このADには終末期医療の現場から次のような問題が指摘されてきました。

- ・患者に判断能力があっても、将来のあらゆる状況を想定して支持することには限界がある
- ・患者が家族と治療の希望について話し合っていない
- ・患者の医療ケア環境が変わるとき、書面が何処にあるかわからなくなる
- ・いったん作成されると、患者の状況の変化が反映されることがあまりない
- ・患者のADに従わない医師がいる

（参考：田中美穂『患者の意思決定を支える事前医療・ケア計画（ACP）』2015.11.13朝日新聞デジタル版）

#### ◆終末期ケアにどう取り組むか

わが国ではその議論さえこれからと思われている「リビングウィル」を最善と考えていた常識は古くなりつつあるようです。ケアのその先には、例外なく終末期があります。既にターミナルケア（看取り介護）を実施しているはちす苑のような高齢者介護の現場は、このACPを次の実践課題として考えるべきでしょう。もちろん障害者福祉も終末期ケアをどうするかは避けられないテーマです。福祉はこれまでもこれからも、人の「生老病死」と向き合う仕事であることを再認識する機会としたいと思います。

## ▽マイタウン

### ちびっ子たちの新学期

#### <根づけ!“愛光の花”>

子どもたちと学童室前に置いてあるプランターの植え替えをしました。ペチュニアとアズーロコンパクトを植えました。お家でお母さんやお父さんのお手伝いをしたことがある子もいて、色々知識もあり、手際も良く驚きました。これから暑くなるので水やりなどをしながら、みんなで大事に育てていきたいと思います。(大崎台学童)

#### <ここならではの>

学童室の真ん中に1階から2階に突き抜けるように太い柱があります。まさに大黒柱といった感じの柱です。子どもたちはこの柱が好きで、片手で柱をつかみ意味もなくグルグル回ってみたり、柱を登り何秒で天井に頭をつけられるか競争をして楽しんでいます。時には順番待ちの列までして…。おかげで柱はいつもツヤツヤしています。ところがツルツルにもなっているので、くれぐれもケガのないようにと見守っている今日この頃です。(大崎台学童)

#### <オトナげない!>

卓球が盛んで、低学年の時とは違った、ネットすれすれの激しいラリーの応酬など、大人も顔負けのプレーを見せてくれます。思わずこちらも本気になり、子どもたちに「オトナげない!」などと言われてしまうこともしばしばです。

4月後半に初めて利用した4年生から「学童こんなに楽しいとは思わなかった」とのつぶやきが聞こえてきて、うれしくて思わず小さくガッツポーズ!(大崎台学童)

#### <大人になったね>

外遊びで転んでしまい、ひざを擦りむいたことを保護者に報告した際、保護者が子どもに対してひとこと「大人になったね」。「保育園の時はあまり体を動かさなかったせいかケガがなかった。ケガをしたのは学童で体を動かして遊んでいる証拠」と、喜んで帰られた。(根郷学童)

#### <学童通信新タイトル>

子どもたちに募集したところ、たくさんの応募がありました。「ニコニコ」「パワフル」「根郷っこ」…中には「天才とは1%のひらめきと99%の努力である」という格言まで。みんな、心にたくさんの素敵の言葉を持っていました。そんな中で「心をひとつに」と書いてくれた子がいました。「この言葉にはどんな意味があるの?」と尋ねると、「自分の気持ちや相手の気持ちを大切にすること」「お互いが思いやること」…次々と出てくる優しい言葉。思わず胸が熱くなりました。その気持ちを守っていけるように、私も頑張ろう!(第二根郷学童)

#### <好き探し>

入所してから1か月が経過するこの時期。緊張感から解き放たれ、疲労も蓄積し、各々の「地」が顔をのぞかせる。子ども同士の遠慮もなくなっているからトラブルになる。手も出る足も出る。集中できることが見つからなければ尚更である。度を越すこともあり、保護者を交えての話し合いを要することも少なくない。職員は安全確保にやっきになって、ついつい制止する言葉が増える。大声が出る。次に何をするかばかり考えてハラハラしてしまう。

下校したら羽目を外すのは子ども本来の姿であろう。大半の児童は「学童行ったら、今日もあれやろう」「○○ちゃんと遊ぼう」と目的意識があるようだ。そういう場合はその世界に集中し没頭できる。しかしそうでない場合、何だかクサクサし物や人に当たってしまうようである。だからこそ我々職員はその子の「好き」を探したい。自分の「好き」がいつしか「得意」になり、楽しさと呼んでくるのだと思う。時に「おせっかい(今は“ウザイ”だろうか)」と言われながらも、あきらめなくて、妥協しないで一緒に「好き」を探したい。今年も“好き探し”が始まった。(寺崎学童)

## わが家の「明治150年」

私のおじいさん、おばあさんは江戸時代の人です、と言えば「まさか？」と驚かれるだろう。父方の祖父は安政元（1855）年、祖母は文久3（1863）年生まれである。その祖父母から父は明治36（1903）年に生まれ、そして私が昭和22（1947）年に生まれたと説明すれば納得していただければよい。

祖父は、鳥羽伏見の戦いに始まる明治維新の年、1868年（慶応4年・明治元年）は満13歳である。現在の名古屋市近郊の農家の長男として生まれている。もしかしたら、錦の御旗を押し立てて江戸を目指して進撃する官軍の隊列なども目撃したかもしれない。そんな想像にもかき立てられて、「今年は明治150年」と聞くと、私は誰にも増してそれを身近に感じる。祖父から直接一家の変遷を聞いたわけではないが、断片的に残る記録から、明治～大正～昭和～平成と続いてきた“わが家の歴史ドラマ”の再現に興味もわくのである。

農家の長男に生まれた祖父は、まさにその明治元年、突然京都の寺で得度（出家）した。13歳の少年の身の上に何がおこったのだろうか。それはいまも謎である。「御一新」という言葉が今も伝えられている。武士も庶民もチョンマゲを切って、“ご破算で願ひましては”の文明開化の世の中の到来である。まるでそのタイミングに合わせるかのような祖父の人生の転機だった。…こんな調子で150年をたどれば本当の大河ドラマになってしまう。この先は少々端折る。

祖父の生きた時代、自由律の俳人・種田山頭火（1882～1940）のような各地を放浪する修行僧の姿も珍しくなかったのかもしれない。山頭火のような孤独な旅ではなかったが、京都を振り出しに、滋賀県、三重県などの寺々の住職を務め、その間に家族も増えて、62歳の明治35（1902）年、私の故郷である

山陰の旧城下町の寺に入る。それから1942（昭和17）年に没するまでの祖父の晩年は、日本が戦争への道をたどる時期だ。

ところで、今でこそ住職は家業のごとく世襲が当然のようにみられている。しかしキリスト教の教会同様、本来寺院は布教活動の拠点であり、地域住民が信仰の祈りを捧げるために集う場所である。宗教法人でもあるので、住職の一族が相続していく私有財産でも家業でもなく、あえていえば本山からの辞令を携えて赴く「任地」に過ぎない。そうした意味で各地の寺を転々とした祖父からは、古い時代の出家者としての姿がしのばれる。

私は住職の家庭に生まれ、寺の本堂に安置されている阿弥陀如来像を見ながら育った。その寺では中学生までを過ごしたただけなので、71歳になろうとしている私の半生の4分の1にも満たない。しかし人並みに年齢と共に望郷の念は募る。私の場合それは「寺」という、一般家庭とは異なる独特の空間と結びついている。五男四女という子沢山の末子という事情もあって、私は将来僧侶になるべく教育されることもなく育ち、その寺は祖父から父へ、そして私の兄へと継承されてきた。

ところが昨年、寺を継いだ10歳上の兄が高齢により住職の務めを果たすことに限界を感じ辞職する決心をした。だが兄の子を含めて親族中に後継者として名乗り出る者はいなかった。ついに祖父から引き継がれてきた寺を明け渡すしかなくなってしまった。

その知らせを聞いて、昨年秋、最後に一目見ておこうと生家の寺を訪れた。祖父母も父母も、境内の一角に眠っている。

そして今年1月、正式に引き継ぎを終えたと姪が伝えてきた。

何やら“わが家の明治150年”のドラマの最終回が終わったような気がした。

（法澤 奉典・のりざわ とものり）